

東京大学医科学研究所附属病院 放射線部の紹介



【施設紹介】

東京大学医科学研究所はその前身が伝染病研究施設としての成り立ちで、研究所の初代所長は細菌学の権威、北里柴三郎博士です。研究所は1892年（明治25年）に伝染病研究所として創設されて附属病院はその2年後の1894年（明治27年）に設立されました。当初、私立衛生会の附属でしたが、最終的に文部省に移管されて1916年（大正5年）に東京帝国大学附置伝染病研究所となり1967年（昭和42年）に医科学研究所に改組されました。現在、附属病院は国立大学法人で唯一の附置研究所附属病院という貴重な存在になっております。

当院は大学病院という肩書でありながら病床数122床、病院職員数267人とかなり小規模な施設となっています。診療科としては内科、外科、放射線科、麻酔科、脳腫瘍外科、泌尿器科があります。また所在地が港区白金台に位置することから各医療機関の基幹病院に取り囲まれたカタチとなります。大御所として広尾の日本赤十字医療センター、済生会中央病院、東京都立広尾病院、NTT東日本関東病院、国際医療福祉大学三田病院、さらに北里柴三郎博士の北里研究所病院を合わせるとその合計病床数、おおよそ3000床以上が2km四方に点在しております。

【組織・人員管理体制】

放射線科医師は部長（准教授）、講師、助教の4名が在籍、昨年度まで診療放射線技師は5

名でしたが、病院改革プロジェクトにより当直業務が導入されるにあたって新たに放射線技師 4 名が採用されて現在 9 名の構成となっております。技師長 1 名、主任 2 名、技師 6 名でそのうち女性技師は 1 名です。昨年度までは技師 5 名体制でしたのでたとえ技師長といえども病棟・手術後ポータブルをはじめとして各モダリティーに対応すべくフレキシブルな体制を敷いておりました。当直業務については就業規則の改正、業務の詳細、当直室の手配などをただいま進めて来年度の中頃から本格的な業務導入を目指しております。

【基本方針・基本理念】

医科研病院は感染症の研究と治療をつなぐための医療機関として設立されて 125 年という長い歴史の中で設立当時の使命を受け継ぎ、難病に対する画期的な診断や治療方法を開発してゆくのが使命であると肝に銘じています。臨床現場では、がん・感染症・免疫疾患の領域において、標準治療では治りにくい難病や他の病院では診療経験の少ない稀な病気を積極的に受け入れるプロジェクト診療を行っています。とりわけ、基礎研究の成果を治療に役立てるための橋渡し研究（TR:トランスレーショナル・リサーチ）や初めてヒトに実施する First-in-Man 試験のような早期臨床試験に積極的に取り組んでいます。実際、造血幹細胞移植を含む細胞治療、遺伝子治療、ゲノム医療など先進的ながん治療において我が国の先鞭をつける役割を果たしてきました。放射線部でもそのような先進医療に対応すべく日々の検査に邁進しております。

【各部門の特徴】

平成 14 年に新病院が新築されてすべての医療機器が更新されましたが、かれこれ 17 年の歳月を経て放射線機器もそのほとんどが更新時期を迎えているのが現状です。CT、MRI 装置は比較的順調に更新が行われておりますが、その他の機器は更新計画が遅々として進んでおりません。核医学検査はハイブリッドタイプでガンマカメラと PET-CT 機能を搭載しておりますが、なにぶん PET 専用機ではないため撮像時間がずいぶん長くなってしまふことが難点です。放射線治療は血液腫瘍内科が造血幹細胞移植を行っているため全件数の 6～7 割が TBI（全身照射）となっており一般的な外部照射の件数はそれほど多くありません。一般撮影 2 室、X 線透視室 1 室、骨密度測定室 1 室、乳腺撮影装置・歯科パノラマ撮影装置・デンタル撮影装置の 3 装置が 1 室に収まっています。一昨年まで血管造影装置を保有しておりましたが、手術支援ロボット（ダ・ビンチ）にその検査室を譲る形で退役しております。

現在、東京大学本院病院との間で本郷一白金プロジェクトが発動されて地域医療ネットワーク HumanBridge を急ピッチで構築して本院病院からの放射線検査委託を準備するほか、泌尿器科の新設、手術支援ロボットダ・ビンチの導入等により新たな検査の対応が求められています。大学病院としては最小規模での運営ですが、先進医療に向けて病院職員が一丸となって取り組んでいく中で放射線部も足並みを揃えながら、その診療の一助となっていけば幸いです。